

枯れていく。でも好きだから。

「花言葉は知らない」

第6稿 251218

【人物一覧表】

石田花（いしだはな） 女性・29歳

佐藤秋人（さとうあきと） 男性・24歳

坂井誠（さかいまこと） 男性・43歳

経理年配の女性

1

秋人の部屋・明け方

カーテンのほんの小さい隙間から、まだ青い朝日が覗いている。

石田花（29）は、朝の支度を終えて、バスルームから出てくる。

鍵を手にとった音で、ベッドで寝ていた秋人（24）が起きてくる。

秋人「（眠そうに）花さん」

花「おはよ」

秋人「一回帰るの？」

花「うん、またあとで」

秋人「いつてらっしゃい」

秋人は玄関まで花を見送り、ハグをする。

一緒に過ごせた時間に満たされている秋人。

花「秋ちゃんも、いつてらっしゃい」

一方、笑顔だが、どこか遠くを見ているような、花。

3	2
花の部屋・ベランダ・早朝 カーテンは閉め切られている。 吸い殻の残った灰皿が置かれている。 花は色味の少ない洗濯物を干している。 ふとスマホを出して、電話をかける。 坂井の声「ん、起きました……」 花「おはようございます」 坂井の声「すみません……」 花「朝まで仕事してましたね？」	花の部屋・玄関・早朝 花は秋人の部屋で出た洗濯物などの入った大きめの バッグを持っている。 鍵を開けて中に入る。

	4		
	並木道	出勤している花。 坂井とのトーク履歴を見返しながら。 簡素な仕事のやり取りだけが並んでいる。	坂井の声「すみません……」 花「（笑って）会社でお待ちしてます。朝イチ、会議ですよ」
	5		
	会社・会議室	資料が綺麗に並んで準備万端の会議室に花ひとり。 ワラワラと参加者が入ってくる。	
		花「おはようございます」 「おはよー」と挨拶しながら、それぞれ席に着く。 横を通った坂井誠（43）と目が合う。 バツチリと指で丸を作る坂井。	

6

オフィス街

いえいえ、と無言で謙遜して首を横に振る花。笑顔で。

バタバタと走って入室する秋人。

秋人「すみません！遅くなりました！」

花も秋人も着席して、会議が始まる。

坂井「では、全員揃いましたし、まず……」

外回り中の花。

スマホの通知。坂井からメッセージ。

『朝ありがとう、独身には救いです。会議の準備もバッチリです。』

『私も早起きできるので助かります。今から**社、行ってきます』と返信。

にやっとして。よし、と気合いを入れ直す。

7

会社・オフィス

外回りから戻ってくる花。自分のデスクに荷物を置く。

隣のデスクは秋人で、こっそり目線が合って、お互い微笑む。

書類だけ持って、坂井のデスクへ。

花 「坂井さん、今大丈夫ですか？」

坂井に声をかける。

坂井 「ん、いいよー、どうした？」

花 「**（社名）さん、契約更新しつつ、新規のプランで、こういうことできないかって、ご提案があつて……」

坂井 「なるほどね」

花 「売り上げは上がりますけど……」

坂井 「**さんだったら、現状の契約内でも調整してあげたいよね」

花 「そうなんです、大口なので……」

坂井「うん、いいよ。契約内の方針で上と話すわ。継続取れる

方が大事だからね」

花「ありがとうございます！」

坂井「さすがです、花さん。ナイスジャッジ」

花「いえ、坂井さんなら、そう言ってくれると思ってました」

にこやかなふたり。呼吸が合っている感覚。

デスクに戻る花。ちよつとだけにやけた顔が戻らなくて。

視線は、坂井を見ている。

秋人「花さん、この資料なんですけど」

花「ん？」

花は秋人のパソコンを覗き込む。

二人は距離が近くなつて。

花「あ、これはね」

秋人「……」

説明している花の横顔を、秋人は至近距離で見つめていて。

花 「佐藤くん？」

秋人はさらに、ぐっと距離を詰めて。

秋人 「(こそっと) 近いなあと思って」

花 「(こそっと) こら」

人差し指を口の前で立てて、小さく「しー」と言う。

8

会社・オフィス

デスクワークしている花。

たばこから戻って来た坂井、秋人。(坂井のたばこの銘柄が見える)

坂井 「花。佐藤くんが、花さんすごいって言ってたよ」

秋人 「ちょ、坂井さんチクらないでくださいよ！」

花 「え？ 佐藤くんが？」

坂井 「(真似して) 花さんすごいっす、って」

花 「(笑って) 坂井さんはそうやってプレッシャーかける」

坂井 「そんなんじゃないよ」

花 「坂井さんは思っていないもん」

坂井 「思ってるって」

花 「ふーん、そういうことにしましょう」

花、頬を膨らませてみせる。

坂井、自分のデスクに戻りながら、

坂井 「もう、すぐ怒る。ごめんって」

花 「あ、坂井さん」

坂井 「ん？」

坂井、立ち止まり振り向く。

花 「明日の会食の申請出しました？」

坂井 「あ、やべ。忘れてた」

花 「（笑って）出しておきました」

坂井 「さすがです！ありがとうございます！」

坂井、振り返ってデスクへ戻って行く。

花、満足そうにニヤニヤして、デスクワークに戻る。
ふたりのやりとりを見ていたが、秋人もデスクに着く。

駅前・夜

スマホを触っている花。

少し離れたところから、秋人が手を振って走ってくる。

秋 人「花さん！」

人目を気にせず、抱きしめる。

花 「秋ちゃん、駅だから！」

秋 人「会いたかった」

花 「会社で会ったよ」

秋 人「会社じゃ話せないもん」

花 「秋ちゃんが報告不足なの」

秋 人「そういうことじゃなくて！」

花 「（遮って）はい、手」

花は手を差し出す。嬉しそうに秋人は恋人繋ぎする。

嬉しそうに、駅を離れる二人の背中。

手はぎゅっと固く繋がれている。

10

秋人の部屋・夜

仲良くごはんを食べている二人。

お酒も入っていて。

秋人「坂井さんが、花さんの頑張り方は見習うな！って言うて

ました」

花「（笑って）私がすぐ無理しちゃうの知ってるからな、あの人」

秋人「……仲良いですよね」

花「ん？仲良く見える？」

秋人「普通の、上司と部下の距離感じゃないと思います」

花「んー、長いから、としか言えない。私が坂井さんに甘えてんの」

秋人「坂井さんと同じこと言ってます」

花「同じこと？」

秋 人「俺が花に甘えてるだけだーって」

花 「(吹き出して) 言いそう!」

秋 人「ほら!」

花 「疑ってる? んー、本当になにもない」

秋 人「……ちよつとだけ。でも、信じてます」

花 「でも本当に私が甘えてるだけだからな」

秋 人「じゃあ、俺にも甘えてくださいよ!」

花 「秋ちゃんへの、甘え方は、こう、違うじゃん」

秋 人「甘えてるんですか?」

花 「甘えてるじゃん、世界で一番」

秋 人「(笑って) 世界一?」

花 「うん? 宇宙一?」

秋 人「宇宙一?」

花 「んー、人類一?」

秋 人「狭くなってる!」

花 「えー! 狭くなったかなー?」

なんて、爆笑している。

11

秋人の部屋・深夜

テレビの明かりだけついている部屋。

ふたりは濃厚にキスして求め合う。

吐息だけが、部屋に響いている。

キスの合間、ふたりは無言で見つめ合って。

秋人「花さん」

花「ん？」

秋人「すきです」

花「んー」

秋人「大好きです」

花「可愛いね」

秋人「花さんは？」

花は黙って、キスだけ返して、頭を撫でる。

花「……ん？」

秋人「ずる」

12

花 「もっと、好きって言って」

秋 人 「……ずる」

花 「ん、可愛い」

秋 人 「ずる！」

秋人はヒートアップして、吐息は深くなっていく。

秋人の部屋・深夜

ベッドで眠る秋人。横で眠れない花。

花 「……」

秋人の寝顔を見つめている。

こつそりベッドから抜け出す。

坂井とのトーク画面を開く。

内容は簡素な仕事のやりとりだけ。

理由もなく、遡って、読んで、それをただ眺めている。

秋人はうつすら目を開けて、それを見ていて。

13

オフィス街

歩いている花。

スマホの通知が鳴って、立ち止まる。

秋人からの通知『今日うち来る?』。

少し考えて、ポケットにスマホをしまおうとすると、

また通知。

坂井から。『来週の会食の店どうなってたつけ?』。

道の端に寄って、即座に電話をかける。

数コールで坂井が出る。

坂井「お疲れさまー」

花「お疲れ様です。もう、坂井さんすぐ忘れるんだから」

坂井「え、送ってくれてたつけ?」

花、笑顔で、電話しながら歩き出す。

花「昨日送りました。ワインの種類が多くて、個室の……」

14

会社・オフィス

デスクワークしている花。

秋人が外回りから戻って来て。

秋人「花さん、返事……」

花「ん？」

秋人「さっき、メッセージ送りました」

花「えっ、そうだっけ？」

秋人「もー」

花は周囲が気になる。特に坂井に見られてないか。

花「（誤魔化すように）資料のチェックね、ごめんごめん！」

秋人に愛想笑いを返す。

拗ねたように、秋人は見つめてくる。

笑って返すが、周囲を気にして、小さく「いら」と

言う。

15

花の部屋・ベランダ・夜

16	ビルの前	カーテンが閉め切られた部屋。明かりは漏れてなくて。 灰皿には火の点いたたばこ。銘柄は坂井と同じもの。スマホを持ってぼーっとしている花。 開いているのは坂井とのトーク画面。 『明日起こしますか？』に未読スルー。返事を待っている。 営業周りの後、ビルの前で、花と坂井。 坂井「おつかれっす。今日も、いいプレゼンでした」 花「坂井さんに比べたら、全然です」 坂井「直帰？」 花「いえ、帰社します」 坂井「いいよ、直帰しなよ。俺電話しとくし」
----	------	---

17

オフィス街

花 「直したい資料もあるので。大丈夫です」

坂井 「じゃあ俺も」

花 「え、坂井さんこれから会食じゃ……」

坂井 「ん、会社からのが近い」

花 「どっかで休憩してたらいいのに」

坂井 「ん？ いいじゃん、一緒戻ろうよ」

坂井は花の返事も聞かず、先に歩き出す。

花 「もう」

困ったように、呆れたように、ついていく花。

花、坂井歩いている。

坂井は花のペースに合わせて歩いている。

でも花は少し追いかける形。

ふたりの視線は交わらない。会話もない。

お互いペースを合わせるので、歩幅はゆっくり。

18

会社・オフィス

帰社してくる二人。

坂井「資料、直すんだっけ？」

花「はい、今日の内容反映して、すぐお送りしたいなと」

坂井「そっか、キリいいとこで帰りだね」

花「はい」

坂井「俺、すぐ出るから、なんかあったら連絡ちょうだい」

花「え、会食隣の駅ですよね？」

坂井「……時間、勘違いしてたわ」

花「もう。だから帰社しないでいいって……」

坂井「ごめんって。部長には伝えといて」

花「はい。会食いつてらっしゃいませ」

坂井「うん、また明日」

花「お疲れ様でした、お気をつけて」

秋人は二人の会話を盗み聞いていて。

19	
会社・表	花は秋人を一瞥もせずに荷物を置いて部長の元へ。 デスクに戻っても、すぐデスクワークを始める。 秋人との会話は無い。 ガードレールに腰掛けている秋人。 そわそわ、スマホを見たり、入り口を見たりしてい る。 中から花が出てくる。 秋人「花さん！」 花「佐藤くん？」 秋人「偶然ですね！ 今帰りですか？」 花「うん？ 佐藤くん、とっくにいなかったっけ？」 秋人「いや……忘れ物して、さっき、出て来たところす 花「そっか。じゃあ、駅まで、一緒行こうか」 二人、同じ方向に歩き始める。

	21		20	
	花の部屋・ベランダ・夜		道	
	灰皿には火の点いたたばこ。 スマホが鳴る。秋人から着信。 着信には出ない。通知音だけが鳴っている。	上機嫌で帰って行く。 花、ニヤニヤしてすぐ返信。 『も助かってます』。 坂井から『いいお店予約してくれてありがとう。い	コンビニの袋を下げた花。 スマホが鳴る。 花は少し距離を置く。	秋人は、いつものふたりの距離感で。

	22		23	
『何時になってもいいから、電話ほしいです』とメ ッセージ通知。 既読はつけない。		通勤中の花。 スマホの通知。秋人から『おはよう』とスタンプ。 やば、返信忘れてた、と思い、『ごめんね、寝てた』 と返信。		
オフィス街		会社・喫煙所		
		坂井が入ってきて、たばこに火を点ける。 すかさず花が入ってきて。 花 「坂井さんー」 坂井 「ん、なに？」		

花 「ちょっとだけ、ご相談いいですか？ たばこ1本分だけ」

と、言いつつ、同じ銘柄の新品を渡す。

坂井 「俺の吸ってるやつ、よく知ってるね」

花 「いつも見てますから。相談料です」

坂井は新品のたばこを手を持ったまま。

坂井 「いいけど、煙吸いすぎないようにね」

花 「はい！ 佐藤くんなんですけど」

坂井 「うん」

花 「報連相がすごく苦手で……」

坂井 「あー」

花 「坂井さんなら、こういうときどう指導しますか？」

坂井 「んー」

坂井はたばこを吸いながら、考えている。

花はそれをじっと眺めていて。

坂井 「まあさ、難しいよね」

花 「坂井さんはどうしてます？」

坂井 「俺？ うーん、指導とか苦手なんだよなあ」

24

花 「私が新卒のときどうしてましたっけ？」

坂井 「花、優秀だったしなあ」

花 「またそれ」

坂井 「大丈夫だって。信じてやりなよ」

坂井はたばこの火を消して、出ていく。

花 「もう」

会社・オフィス

坂井のデスク、前には秋人が立っていて。

坂井 「**ってアポどうなってたっけ？」

秋人 「**……」

坂井 「ん、佐藤くんにお願いしてたと思うけど？」

花がオフィスに戻ってきて、それを見つける。

秋人 「漏れは誰にでもあるから。でもそれ続くと、花とか、先

輩の責任になるから」

秋人 「すみません……」

25	
秋人の部屋・夜	坂井「佐藤くん、元気でいい子だねって各社から好評だし、頑張ってるのはわかるし」 遠目で盗み見ている花。 しょんぼりしている秋人。
くつろいでいるふたり。 秋人「坂井さんに怒られちゃった」 花「怒ってないよ。坂井さんは上司だから、注意するのも仕事」 秋人「でも……目が怒ってた」 花「考えすぎだよ」 秋人「花さんのことになると、坂井さんはちよつと人間になる」 花「人間？」 秋人「仕事できすぎるAIみたいじゃないですか？」 花「（笑って）そんなことないよ、ああ見えて忘れっぽいし、生活能力低いし……」	

坂井の欠点（人間っぽいところ）を、指折り数える

花。

それを見ていて、秋人、不意打ちでキスをする。

ふたり、見つめ合って。

花 「やきもち？」

秋 人 「嫌だった？」

花 「ううん、びっくりした」

秋 人 「……キスしていいか聞けばよかった」

花 「たぶん、女の人に、あんまり聞かない方がいいかも」

秋 人 「なんで？」

花 「ん？ じゃあ、キスしていい？つて聞くね？」

秋 人 「うん」

花 「秋ちゃん、キスしてもいい？」

秋 人 「いいよ」

花、秋人にキスする。

秋 人 「？」

花 「じゃあ、違うパターンするね？」

26	
カフエ・昼	秋人「うん」 花「秋ちゃん、キスしたい」 秋人から花にキスする。 閃いたような顔で。 花、ニヤニヤしていて。 秋人「ねえ！花さんずるい！」 花「ん？」 秋人「花さん！花さん！俺キスしたい！ね、ね！」 花から秋人にキスする。段々濃厚になっていって。
私服の花、秋人。お茶している。	秋人「花さん」 花「ん？」 秋人「実は、今日はプレゼントがあります！」 花「えっ？誕生日じゃないよ？」

秋人「なんか、どうしてもプレゼントを渡したくなつて。じゃんつ」

紙袋を手渡す。中身は小さなブーケ。

花「お花だ……えー、嬉しい！」

秋人「ほんと？よかったあ……」

ブーケを眺めている花。

秋人「よかったら、おうちに飾ってください！」

花「うん、でも、せつかくだからさ、秋ちゃんちに飾ろうよ」

秋人「え？俺んち？」

花「ふたりで会うときは、いつも秋ちゃんちだし。ふたりのものにしたいから」

秋人「うーん、俺は、花さんちに飾ってほしいけどなあ」

花「そっかあ……」

秋人「でも、花さんがそうしたいなら、そうしましょう？」

花「うん、ありがとう」

秋人「あ、でも、うち花瓶とかないや」

花は意味ありげに花束を眺めていて。

28		27
秋人の部屋・夜 ブーケになっていた花が、空きビンやグラス、マグカップなどに活かられて部屋の様々な場所に雑多に	秋人「花さんと映画久しぶりだなー」 なんて秋人はひとりでペラペラしゃべっている。 片手で持った花束は、足にぶつかったり、扱いが粗雑になる。 手を繋いで、歩き出す。 花「うん」 秋人「時間ギリギリになりそうだね」 花は抱えている花束を見つめている。 店から出てきたふたり。	カフェ・表

置かれている。

ふたりの吐息が部屋に響いている。

秋人「花さん。好きです。大好きです」

花は秋人の髪の毛をそつと撫でる。

秋人「花さん」

花「ん……秋ちゃん……」

秋人「ずっと一緒」

花「……うん」

秋人「ずっと、一緒、です」

二人の行為は続いて。

29

秋人の部屋・深夜

下着姿で寝ているふたり。

花はふつと起きて、ベッドを出ようとする。

が、秋人も起きて、抱きしめられて戻されてしまう。

秋人「どこにも行かないで」

	31		30	
	会社・オフィス	洗濯物などを抱えて帰宅する花。 ふと、立ち止まる。スマホを取り出して、坂井へメ ッセージを送る。 『起きてますか？』。	道・早朝	花 「……」 花はただ、秋人の行動を受け入れている。 軽くキスを落として、抱きしめる。
花 「はい！ どうされました？」	経 理 「石田さん、今お時間いいかしら？」 デスクワークしている花、秋人。 経 理 の女性が花に声をかける。			

経理 「坂井さんの精算のことで、これなんだけど」

花 「んー、この間の会食の領収書ですね」

経理 「詳しい情報が書かれてなくって」

花 「あー、私わかります！ お借りしてもいいですか？」

経理 「ありがとう」

花 「すみません、言っておきます。いつもすみません」

経理 「（笑って）いいのよ、石田さんがいつもフォローしてくれてるし」

花 「坂井さん、こういうの苦手なんですよ」

経理 「ふふふ、仲良しねえ」

花 「えー？ そうですか？」

経理 「（こそっと）付き合ってるの？」

花 「（思わず声が大きくなって）えっ？ 坂井さんと？」

経理 「え？ 違うの？ みんなずっとそう思ってたわよー」

秋人、その会話が引かかって、手が止まる。花もそれに気付いて。

花 「（笑って）えー、私はいい加減結婚しろーって思ってたま

すよ」

経 理 「あら、私たちはお似合いだなってずっと思ってたのに」

花 「尊敬してる、先輩です」

経 理 「そう？ 残念だわ」

作業が終わって、経理さんはさーっといなくなる。

秋人の方を見れない花。

32

花の部屋・ベランダ・夜

スマホ越しに秋人の話し声が響いている。

秋人の声「でね？ そのとき、猫がぴゅーって飛び出してきて、

俺すげーびっくりして！」

ひとりでペラペラ喋り続ける秋人。

適当に相槌を打っている花。

置かれた灰皿に火のついた1本のたばこ。

秋 人 「花さん？ 聞いている？」

花 「聞いているよ。でも眠くなってきた」

秋 人「……もう、寝よっか」

花 「ごめんね」

秋 人「ううん」

花 「秋ちゃんも疲れてると思うし、寝よっか」

秋 人「おやすみ花さん。また明日」

花 「お疲れ様。おやすみ」

電話が切れる。

花は灰皿のたばこをいじっていて。

煙をただ見つめている。ジジジ、とたばこが燃える音。

33

オフィス街

外回り中の花、秋人、坂井。

坂 井「ちょっと早いし、休憩しようか」

花 「坂井さんおたばこ行かれます？」

坂 井「うん。飲み物でも買って休憩しといて」

坂井は財布から千円取り出して花に渡して、去っていく。

花と秋人は近くの自販機へ。

花 「秋ちゃんは？」

秋 人 「えー、なににしようかな」

花はお金を入れていて、秋人は飲み物を眺めている。

秋 人 「コーラかなー、あ、ここメロンソーダなんてある」

花 「営業前に炭酸ー？」

秋 人 「俺、ゲップしないんで！ あ、坂井さんの分」

(なにか聞いてない) と言いかけて。

ガコンと音がして、花は自販機から2本の微糖の缶

コーヒーを取り出す。

花 「ん？ 坂井さんは微糖」

笑顔で缶コーヒーを見せる花。

秋人は、呆然とそれを見つめていて。

秋 人 「……夫婦みたいっすね」

花 「(やば、と思つて)……長いだけだよ」

秋人「……そうですか？」

花「私は、秋ちゃんと付き合ってるじゃん」

秋人「……でも周りの人は」

花「（遮って）ていうか、秋ちゃん、先輩の好きなものの把握してなきゃだめ！」

秋人「……花さんも微糖派なんですね？」

花「私も、坂井さんも、微糖派です」

秋人「でも花さん、カフェ行くと甘いのが頼むじゃん」

花「……そんな気分のあるときもあるよ」

喫煙所から坂井が戻って来るのが見える。

花、空気を誤魔化すように、坂井に手を振って。

花「坂井さん、微糖——」

坂井「お、さすがです。ありがとうございます」

花「いつものです」

坂井「わかってるね——」

秋人「……」

秋人、無言で睨んでいる。

34

夜道

坂井「ん？」

秋人「……なんか、ふたり、近いっすよね」

花「佐藤くん？」

坂井「え、セクハラってこと？」

秋人「人によつては、そう見えるんじゃないですか？」

坂井「え、今のどこが？」

秋人「花さん、優しいから」

坂井「え、まじ？今セクハラ要素あった？」

花「今なかったですよ、大丈夫大丈夫」

坂井「え、まじでわかんない」

坂井は困惑している。

花は気まずそうに愛想笑いして、缶コーヒーを一気

飲みして、ゴミ箱へ。

缶が落ちた音が、異様に大きく聞こえて。

35

秋人の部屋・夜

恋人繋ぎで歩くふたり。会話はない。

早足の秋人に、花は頑張つてペースを合わせている。

入ってくる花、秋人。

秋人は強引に花を玄関のドアに押し付ける。

何度もキスして、花の服を脱がしていく。

花 「……秋ちゃんっ……玄関……待って……」

花の吐息混じりの抵抗も、秋人には届かず。

秋人 「花さん……花さん……好き……」

そのまま秋人は強引に行為を続ける。

部屋のあちこちにはあの時の花が飾られたまま。

もみくちゃになりながら、ふたりはベッドに雪崩れ

込む。

秋人 「花さん……」

行為を続けながら、名前を呼び続ける秋人。

37	会社・喫煙所 早朝の喫煙所。灰皿には吸い殻も灰もなくて。花はただ、呆然とそこにいて。
36	花の部屋・ベランダ・早朝 花はただ、吐息を漏らしている。 秋人「花さん、全部ほしい」 花はただ、秋人に委ねている。 秋人「花さん、俺のだよね？俺だけ見て」 花から手を伸ばすことも、抵抗することもない。 秋人が花を呼ぶ声と、行為だけが虚しく続いて。

坂井と同じ銘柄のタバコをポケットから出す。

38

会社・オフィス

電話している秋人。

秋人「はい、はい……申し訳ございません……はい……すぐ確認いたします……申し訳ございません……はい、失礼いたします……」

電話を切ると、泣きそうな表情で花を見る。

秋人「花さん、**（社名）さんからお電話で……」

花「どうした？」

秋人「なんか……」

花「ゆっくりで大丈夫」

秋人「なんか、すごい怒ってて……」

花「うん、大丈夫。わかった、私から確認するね」

花、電話を手にとって。

花「佐藤くんは、過去のメール確認しておいてね。落ち着い

てからで大丈夫」

電話をかけて、取引先とやり取りを始める。

秋人は震えていて。

39

オフィス街

ビルから出てくる花と坂井。

花 「坂井さん、ご同行いただいてありがとうございました」

坂井 「ううん、大したことなくてよかったよ」

花 「申し訳ございません」

坂井 「花が悪いわけじゃないじゃん」

花 「私の、監督不行き届きです」

坂井 「それ言ったら、俺の監督不行き届きです」

花 「……」

坂井 「今日飯行こうか」

花 「……はい」

40

会社・オフィス

帰社してくる花と坂井。

坂井「俺部長に報告しとくわ」

花「はい、ありがとうございます」

坂井「んじゃ、夜ね」

花「はい……」

デスクワークしている秋人が目に入って。

花「佐藤くん」

秋人「はいっ！」

ビクッと反応する秋人。

花「坂井さんに、ちゃんとお礼して？」

秋人「……ありがとうございました。僕のせいで、すみませんでした」

坂井「（笑って）花さん厳しいよー。気をつけてねー」

その場を去っていく坂井。

既にデスクで仕事に戻っている花。

41

オフィス街

秋人は近付いて、小声で、

秋人「花さん、今日の夜……」

花、視線も向けず。

花「今日坂井さんとごはんだから」

秋人「そっか……」

花「工作中だし、私語、控えてね。＊＊さん以外の漏れがな
いか、ちゃんとチェックできてる？」

秋人「あつ、あの……今、こういう感じで……」

花「うん。できたところで報告ちょうだい」

目線の合わないふたり。

秋人は動揺していて。

坂井と待ち合わせしている花。

リップを塗り直している。

スマホを見たり、ちよつとそわそわ。

飲んでいる坂井と花。坂井は、たばこ片手に。

花 「坂井さん、いつもそう！」

坂井 「そんな怒らないでって」

花 「いつも大丈夫って、しょうがないって言う」

坂井 「しょうがないでしょ」

花 「しょうがない」

坂井 「ミスもトラブルも起こるもんでしょ？」

花 「……私、全然だめだ」

涙が溢れてくる花。

花 「坂井さんみたいになりたいのに」

坂井 「十分優秀ですよ」

花 「いつも坂井さんばかり前にいる」

坂井 「……」

花 「私は、坂井さんの、隣にいたいのに」

43

居酒屋・表

坂井「……いつもいてくれてるじゃない」

坂井はたばこの火を消して、手元のビールを飲み干す。

坂井「花がお世話してくれないと、俺はだめじゃん」

花を見つめて、笑顔で。

花もグラスを煽る。悔しい。

花「自分で、言わないでください」

坂井「事実だし」

花「もう」

空になったグラス。ざわつく店内。

ぐつと、決意したような、花。

花「坂井さん」

坂井「……出ますか」

会計をしに席を立つ坂井。

伝えたいことは、伝えられなくて。

店から出てくるふたり。

花 「ごちそうさまでした」

坂井 「ん、一人で帰れる？」

花 「帰れます」

坂井 「そっか。駅まで歩く？」

花 「タクシー乗るの見送ります」

坂井 「いや、歩こうよ」

有無を言わず、先を歩く坂井。

追いかける花。

花 「……」

花、坂井の横顔を見つめる。

坂井 「……佐藤くんとさ」

花 「はい？」

坂井 「佐藤くんと、付き合ってたの？」

花 「……どうしてですか？」

坂井 「仲良くなって、思ってた」

44

駅の喫煙所・夜

花 「……入社から、お世話してるので」

坂井 「付き合えばいいじゃん」

花 「そういうんじゃないです」

坂井 「お似合いだけど」

花 「……坂井さんには、関係ないです」

坂井 「なんでそんな冷たいこと言うのよ」

坂井は無邪気に笑っている。

花も、合わせて笑う。乾いている。

一人泣いている花。たばこを取り出す。

火を点けて、煙を吸い込む。が、咳き込む。

それでも何度か吸おうと続ける。が、何度も咳き込む。

涙が止まらなくて。

何度も響くチャイムの音。

寝ぼけた秋人が鍵を開けると、花が雪崩れ込んでくる。

秋人はそれを抱き止めて。

秋人「花さん？」

花は空き缶だらけのコンビニ袋を下げていて。

花「秋ちゃんー？」

秋人「酔っ払ってる？」

花「秋ちゃん、聞ってる？」

秋人「花さん、これ全部飲んだの？」

花「ねーえ、聞いて」

秋人「ごめん。俺のせい？」

花「なんかさ、なんか、なんか私、疲れちゃったあ」

秋人「うん、よしよし」

秋人は花の背中をさする。

46

秋人の部屋・朝

花 「(笑って) 秋ちゃんー、あったかい」

二人、強く抱きしめ合う。

秋人 「……花さん、たばこ吸った？」

花 「なんか、疲れた」

秋人 「……うん」

花 「もうさ、疲れたんだよね……」

秋人 「大丈夫だよ、俺がいるじゃん」

花 「わたし、わたしさ、好きなんだよね」

秋人 「……うん、俺も好きだよ」

花 「……わたしさ、好きなんだあ……」

秋人 「……花さんはずるいなあ」

秋人はずっと花の背中をさすっている。

花の「好きなの」と声だけが残って。

明るい陽の光が差し込む部屋。

	花は空きビンの水を換えている。 飾られた花はすでに枯れかけている。
47	道
48	会社・喫煙所
たばこをふかしている坂井。ぐしゃぐしゃの空箱。 花が入ってくる。 花 「坂井さん、昨日はありがとうございました」 坂井 「ん、その後どう？」 花 「まあ、なんとか、先方も了承してくれています」 坂井 「まあ、丸く収まってよかったよ」 花 「坂井さんのおかげですよ」	

49

坂井「そんなことないよ。花さんが優秀だからです」

花「またそれ」

坂井、ふっと笑って。花も、つられて笑顔で。

でも、目線は合わなくて。

坂井「……ていうか、朝、見たよ」

花「はい？」

坂井「佐藤さんと付き合ってたじゃん」

花「（笑って）坂井さんには、関係ありませんから」

坂井「出た。冷たいこと言わないでよ」

ふっと、目が合って。

花「セクハラって言いますよ」

二人で笑っている。

会社・オフィス

喫煙所から戻ってきた花と坂井。
秋人「花さん！」

50	
駅	花 「どうした？」 秋 人「先日の件、お詫びとお礼です！」 秋 人は花に花束を渡す。 周囲は少しざわつく。坂井もびっくりしていて。 花 「花束で？」 秋 人「花束が、一番、気持ちが伝わるかなって」 花 「ええ……？」 秋 人「えっ」 花 「（笑って）せっかくだし、デスクに飾ろうかな」 秋 人は笑顔で、でも坂井をチラ見して。 花、駅の大きなゴミ箱に、持っていたたばこを捨てる。 すぐに去っていくが、振り返る。

51

秋人の部屋・早朝

カーテンのほんの小さい隙間から、まだ青い朝日が覗いている。

窓際には、花が買ったであろう、花瓶に枯れかけた花が飾られている。

花は、朝の支度を終えて、バスルームから出てくる。鍵を手にとった音で、ベッドで寝ていた秋人が起きる。

秋人「(眠そうに) 花さん」

花「おはよ」

秋人「一回帰るの？」

花「うん、またあとで」

秋人は花を抱きしめる。

秋人「行かないで」

花「うん？」

秋人「置いて行かないでよ」

花 「……置いて行かないよ」

秋 人 「好きです」

花 「……」

花は秋人にキスする。

そのまま秋人から逃れて、玄関へ。

秋人は追いかけてきて、玄関ドアに壁ドンしてキスする。

秋 人 「花さんは、ずるい」

花 「私は、ずるいよ」

花からもキスして、部屋を出ていく。

どこかスッキリしたような、だけど幸せそうではない、そんな顔で。

了